

第二回「泥流地帯」全国高校生朗読甲子園

決勝朗読原稿 続泥流地帯「火柱」第五節

走る。走る。が、もどかしいほどに、足が遅い。拓一の額にも、耕作の首筋にも汗が流れる。ても弥生も、それぞれ拓一と耕作の背にしがみついている。佐枝が少し遅れて走る。拓一がふり返る。四千数百メートルも噴き上げている煙が、頭上に覆いかぶさってくるようだ。

耕作は走りながら、春の爆発の時を思い出す。拓一と二人で登った山の上から、黒い小山のようにせり出して来る山津波を思った。あの時の驚愕が甦える。山の下の祖父母たちに向って、

「じっちゃーんっ！山津波だあっ！早く逃げろーっ！」

と叫んだあの時の、言いようもない恐怖と焦燥が、胸を噛む。祖父母と良子が、あつという間に濁流に吞まれてしまった一瞬がありと目に浮かぶ。

走る。無言で走る。噴煙が耕作たちの上にのしかかる。のどがからからだ。汗が目に入る。どこかで人の叫ぶ声がある。馬車の音が響く。追いかけられるようにまた走る。ごろごろと、凄まじい音を立てて流れたあの泥流が、今にも襲ってくるような気がする。幾百の流木が、トンボ返りを打って流れる様、山裾を削り取る濁流の凄まじさ、家も馬もひと呑みにした様、それらが次々と目に浮かんで消える。

あの日の恐怖が、更に恐怖を駈り立てる。

「兄ちゃんー！」

肩で息をしながら、耕作が呼ぶ。

「何だ？」

拓一が足をゆるめる。

「もうこの辺でいいべ。この間、ここまでは泥流は来なかった」

二人は深山峠を目指して北に走っていたのだ。いつしか長い坂の半ばにさしかかっていた。この前の泥流に襲われた地点を、とうに脱け出していた。

「うん。そうだな」

それでもまだ、拓一の足はとまらない。耕作は道端の草の上に、背負っていた弥生をおろそうとした。が、弥生は耕作の背にしがみついて、離れようとはしない。

「おっかなーい！」

弥生が噴煙を見上げて叫ぶ。幼な心にも、泥流の恐しさが身に沁みついているのだろう。もくもくと湧き上る噴煙が、弥生には泥流に見えるのかも知れない。

佐枝も道端に坐りこむ。

「母さん、大丈夫か」

拓一が佐枝のそばに寄る。

「大丈夫よ」

佐枝はかすかに頬笑んで、前垂れで首の汗を拭いた。

(※記号句読点含八八八字／決勝朗読に制限時間はありません)